



## ※ 韓国国立文化財研究所との共同研究

奈良文化財研究所と韓国国立文化財研究所との間には、長い交流の歴史があります。それをふまえて1999年には、両研究所の間で「姉妹友好共同研究協約書」を締結し、「古代都城ならびに生産遺跡に関する共同研究」をテーマに研究交流を進めてきました。

2005年には、東京文化財研究所と奈文研を合わせた独立行政法人国立文化財研究所(当時)と韓国国立文化財研究所の間に「研究交流協約書」を結びました。また、奈文研と韓国国立文化財研究所との間に「共同研究合意書」を結び、「日本の古代都城並びに韓国古代王京の形成と発展過程に関する共同研究」というテーマのもと、共同研究をおこないました。さらに2006年からは、発掘調査現場に相互に研究員を派遣しあう発掘調査交流を開始し、共同研究とともに、両研究所の間で協約書、合意書を更新しつつ現在も続いている。このうち共同研究の成果は2007年度に『日韓文化財論集Ⅰ』、2010年度に『日韓文化財論集Ⅱ』、2015年度に『日韓文化財論集Ⅲ』として公刊してきました。



日本国内の古墳石室内調査風景



No.64 Mar.2017

独立行政法人 国立文化財機構  
奈良文化財研究所  
〒630-8577 奈良市佐紀町247番1  
<https://www.nabunken.go.jp>

2016年4月には、これまでの学術交流や共同研究の推進状況をふまえ、その内容をいっそう深めていくことをめざし、新たな協約書、合意書を結びました。ここでは、「日韓古代文化の形成と発展過程に関する共同研究」というテーマのもと、①日韓都城制の比較研究、②都城・寺院・墳墓・生産遺跡等に関する遺構・遺物の研究、③古建築技法に関する復原的研究、④遺跡の整備・復元手法に関する研究、⑤そのほか東アジアの文化交流に関する研究、という5つの内容について、共同研究をおこなうこととしました。現在、両研究所の間で共通した研究内容をあつかういくつかのチームを作り、ともに研究員を派遣しあって調査や議論をおこないつつ、5年間で成果を出すというスタイルで研究を進めています。今後は、その研究成果を2020年度に『日韓文化財論集Ⅳ』として公刊する予定です。

このように韓国国立文化財研究所との共同研究は長期的な視点で取り組みつつも、研究の広がりやニーズ等にあわせ、内容の向上をはかっています。今後もこれらを着実に進め、豊かな実りあるものとしていきたいと考えています。

(都城発掘調査部 清野 孝之)



慶州における復元瓦の調査



## 発掘調査の概要

藤原宮大極殿院の調査（飛鳥藤原第190次）

都城発掘調査部（飛鳥・藤原地区）では、藤原宮中枢部の様相をあきらかにするため、近年、大極殿院や朝堂院で継続的に発掘調査をしています。今回は、大極殿院東門と東面回廊を調査しました。その結果、東門の規模を確定し、東面回廊の構造がより一層あきらかになる等、多くの成果を得ることができました。ここでは、その一部を紹介します。なお、調査期間は2016年10月4日から2017年2月6日までで、調査面積は480m<sup>2</sup>です。

これまでの調査で、大極殿院回廊は礎石建ちの複廊形式であり、瓦葺きであったことがわかっています。また、東西南北に4つの門をもつと考えられており、いずれも桁行7間、梁行2間と推測されています。ただし、南門のみ柱間寸法が約5.1m(17尺)と大きく、ほかの3つの門は桁行が約4.2m(14尺)、梁行が約3.3～3.6m(11～12尺)と推定されています。しかし、東門の南端は未調査であり、東門の規模、東門と東面回廊との取り付き部の構造等については不明であり、大きな課題でした。



大極殿院上空から鶴傍山を望む（北東から）

今回の調査で、東門の南端にあたる3基の柱の位置を確認できました。その結果、東門の規模は桁行7間、梁行2間で、柱間寸法は桁行約4.2m(14尺)、梁行約3.3m(11尺)と判明しました。東面回廊では、従来の所見どおり、桁行約4.2m(14尺)等間、梁行約3.0m(10尺)等間の位置で、礎石据付穴や根石を検出できました。しかし、東門と東面回廊との取り付け部は、われわれに大きな問題を投げかけてきました。取り付け部の2間分だけは桁行の柱間がほかよりも短く、さらに棟通りの礎石据付穴1基には小石を充填していました。ほかとは様相が異なるものだったので。取り付け部の構造は未解決ですが、重要な発見であることは間違いないありません。

また、回廊の礎石や基壇外装はすべて抜き取られていましたが、内庭側の基壇外装の据付溝を検出できることは貴重な成果といえます。藤原宮大極殿院・朝堂院の回廊では、これまでに基壇外装据付溝が残っていたことはほとんどありません。今回、この基壇外装据付溝が良好な状態で確認できたことで、より精確に回廊の幅等の規模を検討できるようになったのです。

大極殿院回廊の発掘調査は、東南部分がほぼすべて終了しました。しかし、北東部分には未調査部分が多く残っています。大極殿院回廊の全貌解明に必要な最後の欠片は、ここに眠っているはずです。

1月28日（土）の現地説明会には、季節外れの小春日和のなか、497名の方々にご参加いただきました。熱心にご覧いただき、多くのご質問やご意見をお寄せいただきました。これからも多くの方々の熱意に支えられながら、皆様とともに古代へのロマンあふれる旅路を歩みたいと思います。

（都城発掘調査部 和田 一之輔）



現地説明会の風景（北西から）

## 朱雀大路・二条大路の調査(平城第576・578次)

2016年度の秋から冬にかけて、都城発掘調査部(平城地区)では、昨年度から引き続き国土交通省が進めている史跡朱雀大路等の整備とともにう发掘調査をおこないました。

今回の調査区は、左京一坊城の二条大路(平城第576次)、および右京一坊城の二条大路と朱雀大路との交差点(平城第578次)の2ヵ所です。

第576次の調査目的は、平城第566次西区(右京一坊城)で検出された二条大路を横断する南北溝が、対称地である左京一坊城にあるかを確認することでした。本調査の成果としては、二条大路を横断する南北溝はみつからず、第566次西区で検出された南北溝は左京と右京とで左右対称に配置されていないことがわかりました。また、本調査区のすぐ西側では、宮内の基幹排水路(SD1175)が南面大垣を貫いており、二条大路北側溝に流れ込んでいたと考えられています。そのため、今回の調査で検出した二条大路北側溝の溝幅は西側で7.5mと通常の側溝幅に比べて広く、合流部付近はその水量によって大きくなっていたと推定できます。

第578次の調査目的は、朱雀大路と二条大路とい



二条大路北側溝(東から)

う主要道路の交差点をあきらかにすることでした。これまでの調査(平城第143次・566次等)で、朱雀大路の両側溝は二条大路を横断すると推定されていましたが、今回の調査で、朱雀大路西側溝が二条大路を横断することが確認できました。朱雀大路西側溝の幅は2.8~3.6mと、場所により差がありますが、深さはおよそ0.5~0.7mほどです。大路の交差点にこれだけの大規模な溝が通っていて、当時の人々は困らなかったのでしょうか。

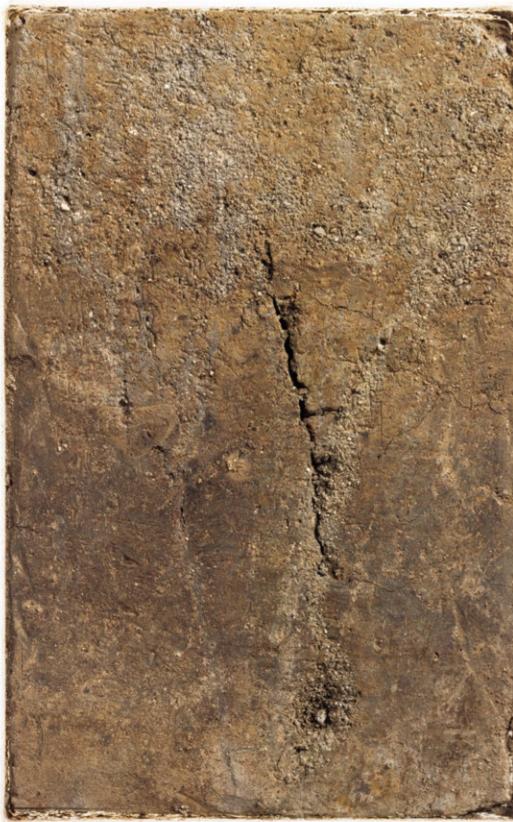
そこで、朱雀大路西側溝に橋が架けられていたかどうかが調査の焦点となりました。結果として、橋脚とみられる遺構や橋の木材などは今回の調査ではみつかりませんでした。しかし、朱雀大路西側溝の東岸で興味深い発見がありました。それは、東岸は直線ではなく凸凹がある、ということです。溝の中にほぼ等間隔に3ヵ所張り出している部分があります。これらの張出は、二条大路の中軸上とその両側に約9m(25尺)の間隔でみつかっています。また、東岸には杭を0.4~0.6m間隔に打ち込み、その間に細い枝を沿わせながらみ護岸がみつかっていますが、これらは突出部分を避けて施されています。さらに、中央張出と北張出の間には、しがらみ護岸の裏側に長い木材が埋め込まれており、これらの木材も突出部分を避けて設置されています。以上のことから、これらの張出は溝が掘削された当初に意図的に掘り残された部分であると考えられます。

この張出部分については、他の大路の側溝での類例がなく、どのような機能を持っていたのかはわかりません。しかし、想像をたくましくすると橋と何らかの関係がある構造物なのかもしれません。これらの張出部分の解明に向けて、今後の周辺調査の進展や類例の発見等が期待されます。

(都城発掘調査部 浦 蓉子)



朱雀大路西側溝(南から)



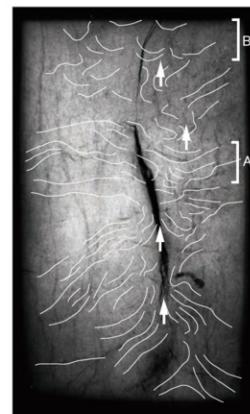
1) 地質切出試料(原寸大)



2) 地質切出試料の全体

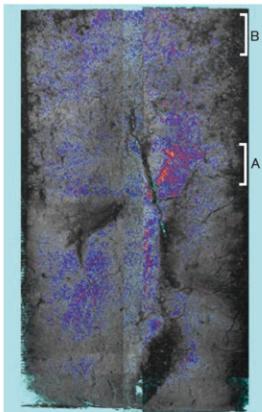


3) 地質切出試料の採取風景



4) 軟X線像

液状化した砂が、堆積物を破壊・変形させて、当時の地表に向かって噴き出す様相がみられる。また、A・Bに示すとおり、大地震による砂の噴き出しが確認できる。



5) 高精細X線CTを用いた三次元構成像

液状化した砂の噴出経路(砂脈)と噴出痕跡(噴砂)が青から赤色で示されている。

## 土の表情が報せる歴史

私たちが何気なく立っている大地には、その土地が経験してきた多くの歴史が記録されています。写真1は、奈良文化財研究所が発掘調査をおこなった朱雀門南側エリア(朱雀大路・二条大路周辺)から発見された、地震による液状化と地割れの跡です。この液状化は、一般的に震度5弱以上の非常に大きな地震で発生する現象といわれています。発掘調査での壁面観察(写真3)に加え、地層の切出試料を軟X線装置や高精細X線CTを駆使しながら調べることで、巨大地震が大地を破壊し、液状化した砂が堆積物を切り裂くように噴き出す様相があきらかとなっていました(写真4・5)。さらに写真4・5のA、Bで示すように、大地の記録は巨大地震が何度もこの土地を襲ったことを私たちに報せてくれているのです。

地震や火山噴火といった自然の猛威について、人間がコントロールできることはあまり多くありません。しかし、私たちが過去に経験してきたことを様々な形で捉え直し、あらゆる対策を考え、そして講じることで、被災の度合いを軽減する「減災」を目指すことはできます。奈文研では、このような発掘調査で発見された災害の痕跡について、調査成果をもとに、「いつ」「どこで」「どのような」災害が発生したかをデータ化し、誰もが閲覧できる「発掘された遺跡の地震・火山災害に関する情報収集とデータベースの構築・公開事業」に取り組んでおり、発掘調査のさらなる活用と、私たちの未来への貢献をはかっていきたいと考えています。

(埋蔵文化財センター 村田 泰輔)

## 日韓発掘交流に参加して

2016年10月10日から12月2日まで、日韓発掘交流事業により、韓国の国立慶州文化財研究所に滞在し、発掘調査に参加しました。奈良文化財研究所と慶州文化財研究所は、2005年から双方の研究員が互いの研究所に約2ヶ月間滞在し、実際の調査に参加するという交流を継続的におこなってきました。

私は今回、新羅(三国時代～統一新羅時代)の王宮遺跡として知られる月城の発掘調査と、5世紀の新羅の墓域である、チョクセム古墳群の分布調査に参加しました。月城では、垓子<sup>ヘルジ</sup>と呼ばれる濠状構造の調査をおこないました。垓子は5つの単位に区分されていましたが、2015年から1～3号を発掘しています。一つの垓子の規模は、長さ100m以上、幅は最大40mにも達する巨大なものです。この分層作業を担当しました。また、チョクセム古墳群では、古墳の構築方法を知るための断面調査に携わりました。

調査では、規模的巨大さや造構密度の高さゆえに土層の理解が難しく、大いに悩まされました。そのような中で、韓国の研究者と拙い韓国語で意思疎通をはかり、時には絵をスケッチブックや地面に描きながら、造構の理解や調査の方法をめぐって議論できたことは貴重な経験でしたし、何より彼らが私の拙い会話能力を気にせずに接してくれたことで、より一層刺激的な調査になりました。

滞在中、慶州文化財研究所の研究員の皆さんには、公私ともに助けていただきました。おかげで資料調査では韓国圏を回ることができ、夜にはお酒を酌み交わして他愛もない会話を打ち解けあうことができました。こうしたことができたのも、これまで双方の先輩方が培ってきた絆があったからこそだと感じています。今後も、両研究所の交流が末永く続くことを望みます。  
(都城発掘調査部 芝 康次郎)



月城垓子で分層する筆者

## 古代官衙・集落研究会研究集会の開催

2016年12月9・10日の2日間にわたって、平城宮跡資料館講堂にて古代官衙・集落研究会の研究集会をおこないました。1997年より始まった同研究会も、今回は記念すべき第20回という節目を迎えることとなり、「郡府城の空間構成」という総合的なテーマを設定しました。

これまで、郡府に関しては、コの字型や品字型等、複数の建物配置の類型化がなされており、古代官衙・集落研究会においても、2009年に門、2011年に四面廄建物、2013年に長舎と継続的に地方官衙の諸建物の検討をおこなってきました。こうした経緯から、郡府を個別の建物や建物配置だけではなく、総合的に捉えてみようというモチベーションで企画しました。

当日は松村所長の挨拶の後、考古学の5名の方々から各地域における郡府の発掘状況・空間構成の報告と、建築史学・文献史学の各分野からそれぞれ、周辺環境をからめた郡府城の空間構成や郡府の建物の特徴について報告がありました。2日目の午後には、坂井秀弥教授(奈良大学)を司会に迎えて、討論をおこないました。郡府の空間構成の特徴を構成する、周囲から区画された広場と、中心的な建物という二つの要素について、その意義や利用法、儀礼との関わり、時期的な変遷等、多岐にわたる有意義な議論が交わされました。そして、報告・討論を経て、郡府には周辺の国府・古墳・集落等、地域社会の背景との関連性を考えていく必要があるという新たな課題も見えてきました。

2日間で、計138名の方々にご参加いただき、会場を含めた熱氣ある議論が交わされ、研究集会は盛会となりました。  
(都城発掘調査部 海野聰)



多数の来場者に満ぐる講堂

## 36年の春秋

私が入所したのは1981年、昭和56年ですから、かれこれ36年間研究所にお世話になったことになります。入所の頃は奈良国立文化財研究所の時代で、平城宮跡発掘調査部には計測修景調査室があり、考古第一調査室は名目上は7名の調査員がいるという、今から思えば夢のような時代だったかもしれません。ただその場にいわせた者にとっては、必死で調査をやっていたというのが偽らざる所でした。その後、1993年にカンボジアの調査が仕事に加わり、2001年の独法化、2010年の平城遷都祭等、色々な経験をさせていただきました。

ただ、今思えば、常に思い続けていたのは、仕事としての研究と個人の研究者として立ち位置とのバランスだったような気がします。この課題はおそらく今の所員の方々も常に考え、思い悩む点ではないかと思います。入所の頃から比べると所員の数は2/3に減り、仕事量は倍増している現状ですから、1所員にかかる負担は、相当に増えていることは事実です。しかしだからこそ、個人研究の進展が研究所の研究と発展を支えていくという構図は、より強くなっているように感じます。所員の今後の活躍に期待しています。長い間お世話になりました。ありがとうございました。（副所長 杉山洋）

## 思い出深い発掘の日々

私は、1987年の12月に入所、平城宮跡発掘調査部考古第一調査室に配属されました。思えば、私の研究所人生は発掘三昧だったように思います。

入所当時は、そごうデパート建設予定地の発掘調査が峠にさしかかる頃でした。そこは長屋王邸跡で、冬の新人研修と翌年度最初の夏現場班員として調査したのがこの現場でした。夏の夕暮れ、発掘作業終了後に総担当者の日さんと共に現場を点検していたところ、工事掘削地区壁際に木簡土坑を発見、これがあの長屋王家木簡溝を発掘する契機となつたことは、今でも鮮明に思い出されます。

その後も長屋王家木簡溝（北端）、二条大路木簡溝と藤原麻呂邸跡、前期式部省と神祇官、藤原京左京七条一坊等、木簡出土・木簡関連遺跡の調査に多く携わりました。星の巡り合せなのでしょうが、私のテーマとしている冶金関連遺跡調査にはあまり

恵まれませんでした。ただ、2011年に朱雀大路縁地工房を調査、平城京の発掘調査開始以来、40年以上不明であった京内官営鍛冶工房の実態解明に一役買うことができたのは、實に幸運だったと思います。

このような発掘人生も、関係者の皆様方に支えていただいたお陰であり、ここに改めて深く感謝申し上げます。どうもありがとうございました。

（埋蔵文化財センター長 小池伸彦）

## 退職にあたって

私が早稲田大学建築学科を卒業したのは1980年で、最初に就職したのは工務店でした。そこで文化財建造物修理工事の現場代理人等を5年間勤めた後、三重県鈴鹿郡閑町（現亀山市）にて町の公務員となり、5年間伝建地区的修理修景事業を経験し、次に長野県木曾郡橋川村（現塩尻市）に移り、2年間仕事をしていると、今度は文化庁建造物課（当時）に来いということで、国家公務員となりました。

文化庁では重要文化財建造物の修理工事現場を回ったほか、ベトナム・クアンナム省ホイアンの町並み保存の協力事業に参加し、通算で30回ほど現地に出張しました。元々大仏様建築に興味のあった私にとって、ベトナム建築はピストライクでした。

2003年からは奈良県教育委員会に出向し、唐招提寺金堂の解体修理に携わる中、古代建築の修理を目の当たりにできたことは自分にとって大きな収穫でした。2006年に文化庁に戻り、2011年からは奈良文化財研究所にお世話になりました。

今更ながら多くの幸運と引き立てていただいた諸先輩方に恵まれた長いようで短かった仕事生活であったと思います。キャリアの最後の奈文研でも、これまであまり意識していなかった分野で知識を深めることができました。感謝申し上げます。

（文化遺産部長 林良彦）



林部長・杉山副所長・小池センター長（左から）

## 飛鳥資料館 春期特別展「藤原京を掘る—藤原京一等地の調査—」

今回の展覧会では、奈良文化財研究所がおこなってきた藤原京の発掘調査のうち、左京六条三坊の調査研究成果を紹介します。

この場所は、藤原京の東に隣接する京内の等地であり、大和三山の一つで、古代より多くの和歌にも詠まれた香具山の西北麓に位置しています。現在は、奈文研都域発掘調査部(飛鳥・藤原地区)の庁舎が建っています。

1985年から1987年にかけておこなわれた調査では、古墳時代から中世までの遺構を数多く確認しました。なかでも特筆すべきは、コの字形に配置されたとみられる藤原京期の建物群で、四町を占める大規模な施設があったことが判明しました。この大規模施設は、みやこの民政を司った「京職」や「左京職」であったと考えられます。

また、調査では、「香山」と墨書きされたものを含む奈良時代の土器が多量に出土しており、平城京遷都後にも活発な土地利用がなされていたことがわかりました。

本展を通じ、藤原京の一等地における官衙の様相や土地利用のあり方などを知っていただければ幸いです。

会 期：2017年4月28日(金)～7月2日(日) 月曜休館(祝日の場合は翌平日)

開館時間：9:00～16:30(入館は16:00まで)

ホームページ：<https://www.nabunken.go.jp/asuka/> お問合せ：☎ 0744-54-3561(飛鳥資料館)



東西大溝から出土した奈良時代の土器

## 平城宮跡資料館 春期企画展「永野太造作品展—草創期の奈文研を支えた写真家—」

かつて奈良文化財研究所に“美術工芸研究室”があったのをご存知でしょうか。現在の奈文研は、平城宮跡や飛鳥・藤原宮跡の発掘調査をはじめ、道路の整備活用、文化的景観の調査研究等に取り組んでいます。しかし1952年に奈文研が設立された目的は、文化財の宝庫である奈良の地で、古建築や古美術品を総合的に研究し、その研究成果を文化財の保護行政に役立てるためだったのです。1980年に奈良國立博物館仏教美術資料研究センターに移管されるまで、美術工芸研究室はその一翼を担いました。

その調査に同行し、写真撮影をおこなったのが永野太造氏です。奈文研の写真台帳に最初に登録された写真は永野氏によるもので、奈文研には15年間にわたって永野氏が撮影した文化財写真が数多く残されています。そこで今回、写真パネルやガラス乾板、撮影機材等、永野氏に関わる資料を所蔵している帝塚山大学と展覧会を共催します。永野氏の写真には、草創期の奈文研の活動の一端や、1950年代を中心とする時期の文化財の姿が写しとめられています。展覧会では、あまり知られていない草創期の奈文研とそれを支えた写真家をご紹介いたします。

会 期：2017年4月29日(土・祝)～5月31日(水) 月曜休館

開館時間：9:00～16:30(入館は16:00まで)

ホームページ：<https://www.nabunken.go.jp/heijo/museum/> お問合せ：☎ 0742-30-6753(連携推進課)



永野太造氏

### ■ お知らせ

飛鳥資料館冬期企画展「飛鳥の考古学2016飛鳥むかしむかし早川和子原画展」

2017年1月24日(火)～3月20日(月) 4,571名

### ■ 記 錄

文化財担当者研修(専門研修/特別研修)

○中世城郭調査整備課程

2017年1月16日～1月20日

11名

○保存科学Ⅲ(石造文化財)課程

2017年2月13日～17日

11名

○デジタル写真課程

2017年3月7日～3月10日

13名

○報告書公開活用課程

2017年3月13日～3月15日

6名

現地説明会等

○藤原第190次発掘調査 現地説明会

藤原宮大極殿院

2017年1月28日(土)

497名

### その他

#### ○訂正

奈文研ニュースNo.63 P8 平城宮跡資料館

展示紹介「第一次大極殿院の模型」

本文7行目 単層 → 重層

↑ 入母屋造り → 寄棟造り

### ■ 最近の本

○第19回 古代官衙・集落研究会報告書

『官衙・集落と土器2』

(株)クバプロ 2016年12月

○海野 聰『古代建築を復元する』

吉川弘文館

2017年3月

編集 「奈文研ニュース」編集委員会

発行 奈良文化財研究所 <https://www.nabunken.go.jp>

Eメール [jimu@nabunken.go.jp](mailto:jimu@nabunken.go.jp)

発行年月 2017年3月